



文章を書くのが苦手なあなたへ 「伝わる・揺さぶる！文章を書く」山田ズーニー



浦添総合病院 外科 宮里 恵子

皆さんが文章を書くとき、それはどんな文章ですか？

日常的に書く文章で一番多いのはカルテでしょうか。診断書、紹介状、メモ、それから？

誰かに何かを伝える文章か、あるいは記録か、文章を書く目的は主にその二つです。

記録やメモは、もれなく分かりやすいこと、それに保存する場所の要件がそろえば十分です。

ところが誰かにあてて書く文章は、記録とは大きく違います。読んでくれる相手を意識する必要があるからです。同じ内容で手紙を書く場合も、相手によって書き方や文章の組み立てが変わります。たとえばお詫び状は、友人に宛てる場合とお世話になった方への場合とでは、心構えからしてずいぶん違うものになります。

それではお詫びの文章の要件は何でしょうか。この文章はどうですか？

「このたびは、ご迷惑をおかけして本当に申し訳ございません。平素万全を尽くしておりますが、今後はこのようなことのないよう精進してまいりますので、引き続きご指導・ご鞭撻のほどお願い申し上げます。」

この謝罪文の形式は、1.謝罪、2.原因究明、3.これから気をつけます、4.これからもよろしく、となります。でもこの謝罪文をもらっても、本気で謝っているのかしら、形式だけじゃないの？と感じる人が多いと思います。

本気を疑う原因は何でしょう。この文章には読み手への配慮がありませんし、この失敗についての原因や対策の掘り下げがありません。それに償いの気持ちが伝わってきません。謝られる立場にある読み手が、「これなら許せそう」という文章にするにはもっとよく考える必要があります。また、気持ちは大切ですが、謝罪を繰り返すだけでは、自分の気は収まっても相手に伝わらないことも多々あります。気持ち

を伝えるためのテクニックは別にあると思われます。

そこで、『誰かに何かを伝える文章を書くには、「誰に」「何を」「どうやって」伝えるかが大切』、ということを教えてくれたのがこの本です。

私は、本を読むのは好きなのですが文章を書くのは苦手です。もともと考えが浅はかです。それは簡単には変えられませんが、持てる文章力でこの気持ちをどうやって相手に伝えようかと悩むことはしばしばです。ごめんなさい、ありがとう、この前こんな楽しいことがあった、ただそれだけのことを伝えたいのに文章が空回りしているような、そんな感じになってしまうのです。

作者は、通信教育の小論文の元講師、考える力・書く力の育成のプロで、現在は独立して大人のための表現講座も企画しています。当然ですが、うわべのテクニックだけで読み手を動かすことはできません。そのために必要な主張、目的、論点と論拠はもちろん、読み手の立場、自分の立場、それから自分を動かしている根本思想は何なのかの七つの要件を見直すことが大切だと作者は言っています。相手を動かすには、読み手の視点を理解することが必要で、その視点から見た自分の主張や論拠はどうか、自分の考えに揺さぶりをかけることが必要なのだそうです。自分を揺さぶること無しに作者の伝えたい「動かす・揺さぶる！文章」を書くことはできないということなのでしょう。

では今私が書いている文章が、読み手にとってどんな意味があるかといいますと、私と同じように文章を書くのが苦手な方も、これを読めば自分の文章を進歩させるポイントがどこなのかきっと見えてくるだろう、ということです。時間のない方でも大丈夫です。拾い読みでも十分ためになるオススメの一冊です。ぜひどうぞ。

『孤高の人』 新田次郎著 新潮文庫 (上・下)



宮良眼科医院 宮良 長治

「なぜ山に登るのか?」「そこに山があるからだ。」このあまりにも良く知られた問答は登山家ジョージ・リー・マロリーが二度のエベレスト登頂に失敗し、三度目の挑戦を行おうとした際に、ある新聞記者から質問されて生まれた。結局マロリーは夢を果たせず、その三度目のエベレストで命を失うことになる。エベレスト登頂が成し遂げられたのはそれから30年後のことであり、それがいかに過酷な試練であったかがわかる。日本でもやはり山に命をかけた人間は昔から数多く存在する。なぜ山に登るのか、この永遠の命題は多くの文学作品を生み出すことになった。今回私が皆様にご紹介したいのは、山岳小説界の大御所、新田次郎氏の代表作といえる『孤高の人』である。実在した不世出の登山家、加藤文太郎の生涯を辿る長編であるが、ほとんどノンフィクションとあってよく、自身も登山家であった新田氏の緻密な取材によってこの小説は生まれた。主人公の加藤は、高等小学校卒の学歴ながら造船技師にまで登りつめた努力の人だった。忙しく責任のある仕事をこなしながらも、登山にもう一つの人生を見だして行く。決して長くはない休暇のほとんど全てを割いて、超人的な脚力で厳冬期の北アルプス縦走など常人が一生かかっても成し得ない程の山行を次々に成功させたが、それは時には無謀な行為、売名行為として批判の対象にもなった。厳冬期の山に入るのは現在でも至難の技であり、毎年のように遭難者を生み出している。昭和初期当時、装備、気象情報などは当然現在よりはるかに貧弱だった。それでも加藤は、ありとあらゆる努力を惜しまず、自らの信念と経験に基づいた創意工夫を凝らし、必ず

無事に生きて帰り、全ての挑戦に失敗することはなかった。彼は、周囲の雑音、世間の思惑などからは全く超越した次元を歩んでいたのである。何故山に登るのかについて、加藤は自問自答を繰り返すうちに、結局山そのものの中に自分を再発見しようとしているのだというところにまで意識を昇華させていった。それはだれ一人として同じ答えがないであろうこの問いに対する一つの見事な解答といえよう。日本でこれ以上はない困難な山行を成功させてきた加藤は更なる高みを求めて、いつの日にかヒマラヤへ行きたいという壮大な夢を持ち、肉体と精神を一段と強化しつつ、儉約を重ね膨大な額の貯金をするまでに至った。山に関する行動では加藤は常に独りだった。あまりにも突出した実力と強い意志が他人を寄せ付けず、その結果が必然的に「単独行の加藤」を生むことになった。そこにはまた加藤自身の性格や人生観も大きくかかわっていた。やがて家族を持ち、危険な登山からは遠ざかりつつあった加藤が、やむにやまれない事情でたった一度だけ、二人で厳冬期の槍ヶ岳へ向かうことになった。これ以上はこの本を読もうという方のためにあえて記さないが、生死を分かち極限の状態においてこそ示された加藤の人間としての大きさは、読む者を引きつけずにはおかないだろう。私がこの本に出会ったのは高二の時だったと記憶しているが、多感な青春時代の私の人生にも大きな影響を与えた。その頃、世界の登山界を席卷した超人ラインホルト・メスナーが、単独、酸素ボンベなし、無線機なし、ロープなし、サポートする人もなしという極限状態でエベレスト登頂を達成した。メスナーは、後に世

界に14座ある8,000メートル超の高山全ての登頂を人類で初めて達成することになったが、その全てに酸素ボンベを使用しなかった。加藤も時代と条件が許せばこのメスナーのような登山家となり得たのではないか。この二人の「孤高の人」の生き様は、私にはどうしてもダブって見えるのである。彼らの凄まじいばかりの精神力とそれを支える強靱な肉体に対する憧れは、大学時代の私を、第1回から連続3回の宮古島トライアスロンへの出場、完走にまで駆り立てることになった。そして医師となった今、自己管理、危機管理のあり方、自らの経験に即した独創的考察の

重要性、最後に頼れるのは自分自身しかないという現実などこの本から学んだことは多い。それだけではなく随所に示される自然描写の素晴らしさも新田氏の得意とするところで、加藤の山行を疑似体験しているような気分になれる。三好達治の詩ではないが「志おとろへし日は」もう一度この本を読み返し、若き日の情熱を思い出し励みにしている次第である。この本に共感できる読者諸氏には、本著と共に、同じく新田氏の三部作ともいえる傑作『栄光の岩壁』、『銀嶺の人』の読了を是非お勧めしたい。

原稿募集！	<p>本の紹介コーナー（1,500字程度） 感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介します。</p>
--------------	---

原稿募集！	<p>「ロゴマークは語る」コーナー 「病・医院のロゴマーク」の原稿を募集しています。どうぞお気軽にご紹介下さい。</p>
--------------	--